



うめむら・おさむ。追手門学院大学基礎教育機構教授。教育研究所長。国際交流委員(2003年〜)。1963年生まれ。1988年慶応義塾大学文学部卒業。帝京大学留学生別科日本語専攻留学生別科長代行を経て、2003年追手門学院大学文学部アジア文化学科助教授に就任。2009年より国際教養学部アジア学科教授に就任。2013年4月より現職。

成長力「日本一の大学」も夢じゃない。 学生諸君、自分の可能性に自信を。

**大学の授業を変える！
学生みずから声を上げて。**

「教授が一方的に知識を注入する講義形式の授業はもう限界。これからは、学生自身が「学ぼう」と思う、そういう体と心をつくる教育こそ必要なんです」。

過去1万人以上の留学生を教え、現在は教育研究所長として大学の教育改革に邁進。今や全国に名高い追手門学院大学「学生FD」の生みの親だ。学生FDとは、学生・教員・職員が一緒に教育改善に取り組む学生主体の活動である。

「大学の授業をどう変えるか。この問題に、学生が声を上げることが大切でした」。

ゼミ、サークル、学友会など、元気の学生がいると聞けばどこへでも出向いて語り、有志学生を募った。そして集まったのが5人の初代学生FDスタッフのメンバーだ。

「みんなとても優秀でした。しかもどんどんよくなっていった。今や本学の学生FDは全国トップレベル。昨年は『学生FDサミツ

ト2012冬』を本学で開催し、全国から56大学、340名を超える教職員、学生が参加しました」。

協同学習の可能性に注目し、教養ゼミ、高大連携のとりくみなどでも、チームワークやリーダーシップの研修等、新たな試みが続いている。

「まず学生の問いが先立つべき。そして、教員や仲間とともに考える。この関係をつくること」と、自主的な学びの大切さを説く。

**留学生も学ぶ意欲低下。
出すぎた杭になれ。**

外国人留学生の日本語教育に携わって23年。近年は日本人学生に日本語教授法を教えることも増えた。

「言語も文化も習慣も異なる留学生には、ツーカーもあうんの呼吸も通じません。必ずディスコミュニケーションが生じるむずかしさがまずあります」。

言葉が通じ、暗黙の了解で感覚を共有できる日本人学生への教育を、「とてもやりやすい」と感じるのはそのためだ。

「しかし壁があるからこそわかりあえる喜びも大きい。理解しあうためには言葉を尽くしてとことん対話する以外に方法はない」。

留学生教育の醍醐味は、異文化間のディスコミュニケーションを克服することである。

グローバルな視点から見て、「日本人の課題は発信力がないこと」。日本の文化は外国文化を受容することから生まれた。

日本人は取り入れた文化や技術を咀嚼して高めるのは得意だが、それを発信するのは「昔から不得手」と指摘する。

留学生の変化に時代を感じることも多い。「かつて反日感情の塊だった韓国人留学生も親日化し、やさしくなった。国が強くなって自信がついたからでしょう。欧米からの留学生は、以前は能・狂言・歌舞伎など伝統文化に傾倒していたのが、今はマンガ・アニメ・ゲームに夢中」。

ただ、留学生も日本人学生も総じて「学ぶ意欲が低下している」と残念がる。

「偏差値が高くないのは伸びしろが大きいということ。追手門学院大学は宝の山です。出る杭は打たれるというが、出すぎた杭は打たれないのが今の本学。学生諸君は、自分の伸びしろを信じて大いに暴れてほしい」。

教室でも、研究室でも、学生が大学を動かす「学生駆動型の大学」をめざし、今日もキャンパスを奔走している。

